

キリストに生きる

中高宗教主事 大久保 直樹

¹では、どういうことになるのか。恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか。²決してそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができるでしょう。³それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。⁴わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。⁵もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。⁶わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。⁷死んだ者は、罪から解放されています。⁸わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。⁹そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。¹⁰キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。¹¹このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

¹²従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。¹³また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい。¹⁴なぜなら、罪は、もはや、あなたがたを支配することはないからです。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいます。

ローマの信徒への手紙 6章 1-14節

復習とか仇討とかやり返す…そんな意味が英単語リベンジの本来の意味なのですが、日本語としての利用では、「雪辱を果たす」という意味もあります。その意味でちょうど一年前、教職員礼拝の担当日に、ワクチン接種副反応の高熱でうなされていた為、前学院長嶋田先生に代読をしていただきましたので、本日は昨年度のリベンジを果たすことができほっとしているところです。

さて、先週の金曜日、わたしたちは衝撃的なニュースを知ることになりました。わたしたちの生きるこの日本において銃撃によって日本の元首相が殺害されるという事件

です。実は今朝の中高での礼拝でもお話いたしました。今回の事件を初めて耳にしたときは、まだどこか他人事でした。けれども被害者が亡くなったこともあります。次第に、他人事から『自分ごと』に変わっていきました。うまくは言えないのですが、次のような理由から『自分ごと』という言葉が思い当たったのだと思います。まず事件が起きた奈良県。わたしの出身地です。そして事件が起きたあの場所の駅。わたしが帰省する際は必ずといってよい程、利用する駅なのです。今の時代は本当にこわいくらいに情報がすぐに集まり、まとめられていきます。ネットニュースを検索していると、ニュースでは報道されない容疑者についてのプロフィール、家族構成、生い立ちや性格について、あたかもあのような事件をおこすであろうと思うような表現の仕方でまとめ上げられていると思われるものも目に入ってきます。たとえどんなことがあったとしても、人を殺してよいということにはなりません。それはその通りなのですが、犯行の動機について容疑者は「母親が特定の団体にのめり込み、多額の寄付をするなどして家庭生活がめちゃくちゃになった」と言っているとのこと。けれども中高生時代の容疑者の卒業アルバムに載っている顔写真は笑顔でした。彼の母親が団体からマインドコントロールされてしまう前は、少なくとも彼に笑顔を齎すことができる家庭であったのではないのでしょうか。特定の団体は宗教団体を名乗っていましたが、本来宗教とは人に希望や救いを齎すものであって、人に絶望や恨みを齎すものであるはずがありません。そのような不幸をもたらす時点でもはやそれは宗教ではないのです。もし母親がその団体に関わっていなければと思うと残念でなりません。悔しくもあります。怒りも湧いてきます。そしてもしわたしが容疑者と同じような家庭環境で過ごしていたとするならば、わたしは果たしてどうしていただろうか…と思ったのです。

これまで決して多くはありませんが、結婚式の司式をしてきました。つい先日かつての教え子が結婚をしたのですが、「先生が仙台でなかったら結婚式の司式をしてほしかった…」なんてお世辞でも嬉しい言葉をもらいました。その結婚式の式辞の場面でわたしが必ず結婚する新郎新婦に伝える言葉があります。それはごくごく当たり前のことと言えばそうなのですが、「社会の最少単位は家庭です。」ということです。他人同士である夫婦がつくりあげる社会の最少単位が家庭なのです。親子には血の繋がりがあり、本来最も深い愛で結ばれているもの。その家庭が・家族が壊される経験。これにより心は大きなダメージを受け、傷つき、歪み、今回のようなことを引き起こすことにもなってしまったと言えるのかも知れません。だからと言って、繰り返しになりますが、いかなる理由があろうとも人を殺してよい理由には絶対になりえません。

ローマの信徒への手紙第6章1～14節。見出しが「罪に死に、キリストに生きる」とあります。冒頭で昨年度のリベンジと申し上げました。昨年度は引用聖句のひとつとして創世記2:7「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」を挙げ、わたしたち人間が創られたまさにそのとき、命の息を吹き入れられて、生きるものとなっている、ということ

お話いたしました。そのわたしたちは、生きるプロセスの中で、喜怒哀楽、様々な経験を重ねる中で、その「命の息を吹き入れられて」「生きる者と」されている幸いを心に思うことができないほどの苦しみ、悲しみ、どん底を経験することもあります。しかしそのようなときにこそ、今度は救い主キリストがわたしたちに息を吹きかけてくださるのです。それはヨハネ福音書における、主イエス復活の記事に次のように記されています。

「20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。 20:20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。 20:21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」 20:22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。 20:23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(p.210)

このように、神によって生きるものとして命の息を吹き入れられて生きるわたしたちは、その人生の途上で命のともし火が消えてしまうのではないかと思うようなときでさえ、というかそのようなときこそ、神の御子である、救い主キリストが、わたしたちに再び新たに生き直すことができるように、命の息を吹きかけてくださるのです。まさにキリストによって生きることが出来る者とされるのです。

では、キリストによって生きるとはどのように生きることをいうのでしょうか。今日与えられています聖書箇所の特に6章13節をお読みします。

06:13 また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい。

この言葉から思い起こされる祈りの言葉をご紹介します。アッシジのフランシスコの祈りとして伝えられている祈りの言葉です。

主よ、わたしをあなたの平和の道具としてください。

わたしにもたらさせてください。

憎しみのあるところに、愛を。

罪のあるところに赦しを。

争いのあるところに一致を。

誤りのあるところに真理を。

疑いのあるところに信仰を。

絶望のあるところに希望を。

闇のあるところに光を。

悲しみのあるところに喜びを。

ああ、主よ、

わたしに求めさせてください…。

慰められるよりも慰めることを。

理解されるより理解することを。

愛されるよりも愛することを。

人は自分を捨ててこそ、それを受け、自分を忘れてこそ、自分を見出し、赦してこそ、赦され、死んでこそ、永遠の命に復活するからです。

【お祈りしましょう。】

今日も命をありがとうございます。み言葉をありがとうございます。あなたによって宮城学院に呼び集められているわたしたちが、こうして生かされて共に生きることを得ているその意味を心に留めてこれからも歩むことができますように。この一言の感謝と願い、わたしたちの救い主、イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。

(2022年7月13日)